

令和三年度

水戸市埋蔵文化財センター企画展



悠久の水戸史 遺跡に刻まれた 人と水の歴史

展示解説シート



笠原水道第10次
岩樋・土管検出状況



権現山横穴群 現況
池の水を抜いた状態



親沼川河床遺跡 現況

水戸藩は現在の下市地区を城下町として開きましたが、この周辺では上水（飲料水）用に足る質の水を確保することが困難でした。そこで、徳川光圀は寛文2（1662）年、水道の調査を望月五郎左衛門恒隆に命じ、望月はその設計を平賀勘衛門保秀に命じました。平賀は笠原不動尊の麓の湧水を千波湖南岸に導くのが最速であるとして、望月に計画書を提出します。測量と工事は永田勘衛門が担当し、入海戦術により僅か1年半あまりの期間で大工事を成し遂げました。

笠原水道は、基本的に蓋石・左右側石・底石により構成されており、これらを総称して「岩樋」と呼びます。その材料は、水戸藩から産出する凝灰質泥岩です。凝灰質泥岩は、近世には神崎石と呼ばれ、均質かつ軟質な加工しやすい岩石として選定されました。備前園から水戸駅にかけての台地の裾には、かつての石材採掘坑が複数残されています。また、場所によっては銅や木、竹で作られた樋も使われていました。

笠原水道第10次調査では、水道の内部に土管が設置されていることが確認されました。この土管は明治42（1909）・43（1910）年の市内水道改良工事に伴うものと考えられています。水の流れを巧みに操り人々の生活を支えた笠原水道は、明治維新を経て近代に至っても、その役目を果たし続けていたのです。

6 水中遺跡 —日本考古学のフロンティア—

権現山横穴群は那珂川から東へ約1.5kmの、沢に面した崖の裾部に立地する横穴墓4基で構成される遺跡で、現在はほぼ全体がヒツ洞公園の池に沈んでいます。近世に著された『新編常陸国誌』には、「洞井荒墳」としてその存在が記されており、少なくとも天明7（1787）年までには農業用の溜池に水没していたことがわかります。この遺跡では昭和37（1962）年の水戸市史編さん事業に伴う発掘調査が行われ、土器、切子玉、金環、人の歯などが出土しました。

親沼川河床遺跡はその名の通り、水戸市と大洗町にまたがる親沼川下流部の川底に立地しています。この遺跡は、地元漁師の方がシジミ漁の際に土器と石器を採集したことから発見されました。採集された遺物は、縄文時代～近世の幅広い年代にわたるものですが、発掘調査は実施されていないため、その全容は不明と言わざるを得ません。

日本では、明治41（1908）年の時点で、長野県の諏訪湖底で曾根遺跡という縄文時代の集落跡が発見されています。それから100年以上が過ぎた現在でも、海・川・湖といった水中に存在する遺跡は陸上の遺跡に比べて、存在の把握や人々への周知が十分に進んでいません。遺跡の保護・保存に関する法律は『文化財保護法』のみであり、水中遺跡調査を専門的に教育する大学もごく少数です。水中遺跡の調査には陸上とは異なる機材や技能が必要となるため、陸上の開発事業への対応に追われていた日本の埋蔵文化財行政では、そのノウハウが培われなかったことも原因でしょう。

一方で、平成13（2001）年のユネスコ総会では『水文化遺産の保護に関する条約』が採択され、韓の中国や台湾でも水中遺跡の保護についての法律が整備されており、発掘調査が盛んに実施されています。日本は世界最長の長さの海岸線を持ちながらも、海をはじめとした水中の遺跡の保護について、進歩の途上にあるのです。

水戸市は平成24（2012）年3月27日に、元冠船が沈む長崎県の瀬島神崎遺跡を、水中遺跡で初めて国指定史跡として登録しました。さらに平成29（2017）年には、日本における水中遺跡保護の体制構築の指針を示すべく、『水中遺跡保護の在り方について』を発表しました。水中遺跡、ひいては文化財全体の保護体制の発展が期待されます。

『海洋国』日本の中であって、「水の都」として発展した水戸。過去を水と生きた先人たちの歴史は、水が作り出した大地に遺跡という形で刻まれています。時に今も水と共にある彼らの存在を、私たちは余すず未来へと引き継いでいかなくてはなりません。人と水とのつながりは、悠久の時を経て不変であることを示すために。

令和3年度水戸市埋蔵文化財センター企画展
悠久の“水”戸史 —遺跡に刻まれた人と水の歴史—
令和3（2021）年10月16日 発行

編集 水戸市教育委員会事務局教育課埋蔵文化財保護課文化財センター
〒311-1114 水戸市塩崎町1094-1 TEL 029-269-5090
発行 水戸市教育委員会
印刷（社福）水戸市社会福祉協議会 水戸市身体障害者職業訓練施設の子社

1 水の都、水戸 一水が作った水戸の大地一

水戸市域の地形は、大きくは丘陵地、台地、及び低地に分類されます。丘陵地は、「水戸層」という基盤でできています。水戸層は、2,303 万～533 万 3,000 年前の、水戸周辺が海に沈んでいた頃に海底に堆積した泥が固まってできた、凝灰質泥岩という岩石でできており、その厚さは数 100m に及びます。この凝灰質泥岩はのちに笠原水道の石材などに利用され、水戸の人々の生活を支える重要な資源となります。

海が後退すると、水戸周辺には那珂川などの大きな河川が姿を現します。この河川によって水戸層が浸食された部分には、「見和層」や「上市礫層」といった、河床礫や砂利でできた層が形成され、台地の基盤となりました。逆に、この時に浸食されなかった部分が丘陵地として残ることとなります。これらの上位には、男体山・赤城山・浅間山・榛名山などから供給された火山灰が積もった「関東ローム層」が乗り、東茨城台地という平坦で広大な地形が形成されました。

さらに、2 万年前の最終氷期には海が大きく後退し、河川が台地を浸食して低地を形成します。低地には河川によって運ばれてきた砂礫や泥などの、いわゆる土砂が堆積しており、これは「沖積層」と呼ばれています。また、那珂川や瀧沼川といった大規模な河川に沿った低地には、川から運ばれてきた土砂が堆積した、「自然堤防」という高まりが点在しています。

ところで、水戸の地形が作られていく中で、那珂川と千波湖・桜川の合流点の間には、「上市台地」と呼ばれる高い台地が突き出たように形成されました。この先端部を「水の出入口」という意味で「み」と呼んだことが、水戸の地名の由来とされています。数、1,000 万年にわたる水とのかわりによって成立した水戸の大地は、特に水運が中心であった時代に交通の要衝となり、「水の都」として発展していくこととなります。

2 水を守る 一縄文時代：坏遺跡一

坏遺跡は、桜川左岸（北岸）の台地上に立地する遺跡です。これまでの調査では、縄文～古墳時代、中世、及び近世の、各時代の遺構が見つかっています。さて、縄文時代前期（約 5,000 年前）頃、地球規模の温暖化などにより、「縄文海進」と呼ばれる海水準の上昇がピークに達します。この時に少なくとも千波湖までは海となっていたことは、湖の南岸に輪軸貝塚という貝塚が形成されていることから後期でも裏付けられています。一方で、縄文時代中期（約 4,500 年前）から後期（約 3,500 年前）にかけては、海や川が氾濫（水面と陸地の境）は徐々に後退していきました。坏遺跡では、縄文時代中期の集落跡が台地上の平坦部、後期の集落跡が台地の裾部の桜川に近い場所に、それぞれ展開する傾向が見られます。時代が下るにつれて集落が現在の桜川に接近していくという事実は、桜川の汀線の後退と関連して理解することができそうです。すなわち、水場に近い場所に住むことが彼らの生活にとって非常に重要であったため、後退していく桜川を追うように集落が移動していったと考えられるのです。桜川よりも一段高いこの場所は、水資源を獲得しやすかっただけでなく、見晴らしも良いことから、水場に集まる動物の狩りにも適していたはずで、坏遺跡の東西に、主に縄文～古墳時代にかけての遺跡が桜川に沿って連って分布しているという点も、この推測を補強していると言えるでしょう。

3 水と戦う 一弥生～奈良・平安時代：柳河町遺跡一

柳河町遺跡は、那珂川左岸（東岸）の自然堤防上に立地する遺跡です。これまでの調査では、弥生～奈良・平安時代の遺構が見つかっています。

柳河町遺跡第 6 地点では、弥生時代後期（約 1,800 年前）の住居跡が、自然流路の下位から検出されました。住居跡は固くしまった粘土で充填されていたことから、穏やかな水流に運ばれてきた細かい土砂によって、ゆっくりと時間をかけて埋没していったと考えられます。一方で、同じ地点で検出された古墳時代の住居跡では、床面の直上に砂が堆積していました。こちらは粘土よりも粒の大きい土砂をもたらす比較的大きな水流、すなわち洪水によって短時間で住居が埋没したため、住人は住処を追われることとなった可能性があります。



上空から見た上市台地・那珂川・千波湖
中央石に水戸の由来、「みと」を望む

遺跡の周りには那珂川が形成した低地となっているため、この近辺で稲作を行っていた人々が、周囲の田んぼを見渡すことのできる微高地に集落を営んだ跡が、柳河町遺跡として残されたと考えられます。しかし、低地は地下水位が高く、川の氾濫の影響を受けやすいという難点もありました。当時の人々は、自然の脅威と戦いながら、利便性と狭間でたくましく生活していたのです。

ただ、低地ゆえの発見もありました。第 7 地点で検出された奈良・平安時代の井戸跡からは、土器片の他に、大型の角材や桶の底材といった木製品が出土しました。木や骨といった有機物は、台地上では腐朽や酸性土壌、乾燥などの作用により分解されしう一方、水没りとなった場合は現代まで残存することがあります。柳河町遺跡の立地は、水戸市では類例の少ない奈良・平安時代の木製遺物を回収する貴重な機会をもたらしました。



柳河町遺跡第 6 地点 S105 遺物出土状況
弥生時代の住居跡



柳河町遺跡第 6 地点 S102 遺物出土状況
古墳時代の住居跡



柳河町遺跡第 7 地点 SE02 完掘状況
奈良・平安時代の井戸跡

4 水で守る 一中世：河和田城跡一

河和田城跡は、桜川右岸（南岸）の低台地上に立地し、坏遺跡の対岸に位置しています。河和田城は 14 世紀前半、大塚氏の家臣飯沼正貞氏によって築かれた、茨城県内でも最大級の中世の平城です。のちに城主となった、江戸氏の家臣春秋尾張守により整備された土塁や堀といった遺構は現在も残存しており、地域で守り伝えられている史跡として、平成 31（2019）年 3 月 20 日に水戸市地域文化財の第 1 号として認定されました。

河和田城跡が立地する台地は対岸に比べて少し低く、城内には桜川支流の沢や低湿地を取り込んでいることから、堀に水を引くことは比較的容易でした。河和田城の、立地条件を巧みに利用した堅牢な守りは発掘調査でも妨げるもので、湧き出す水を常にポンプでくみ出す必要があるほどでした。

河和田城跡第 31 地点の発掘調査は、河和田城の土塁と堀が同時に調査された貴重な事例です。堀跡の底からは、白、下駄、網代などの木製品が出土しました。これら木製の遺物は、柳河町遺跡と同様に水没かりの状態に残存していましたが、発掘調査で掘り出された瞬間から、酸害を得た腐朽や乾燥によって急激な劣化が始まりました。これを防ぐためには、常に清浄な水に浸けて保管するか、木製品にし込んだ水分を丸ごと特殊な薬品に入れ替える、「保存処理」という作業が必要となります。保存処理を行って初めて、木製品は通常の土器片などと同様に保管・展示することが可能となります。



河和田城跡第 31 地点 堀水状況
堀の高まりは土塁（S007）
手前の籠（S007）は築設している



河和田城跡第 31 地点
S011 木製品出土状況
木材に湿り、下駄なども発見

5 水を操る 一近世：笠原水道一

笠原水道は、寛文 3（1663）年 7 月、水戸藩第 2 代藩主の徳川光圀の命によって造られた上水道で、その大部分が地下に埋められた暗渠であることが大きな特徴です。笠原水道の始点は逆川左岸（西岸）の笠原不動尊の麓にあります。水道は逆川を渡り、逆川に沿って北上したのち、千波・元吉田町に立地する台地の斜面を蛇行しながら藤柄町へと東進し、近世の地割が覆った下市地区の道路地下を通進しながら、城東五丁目細谷に至ります。この総延長 10km 以上にも及ぶ水道は、昭和 13（1938）年 3 月 11 日に茨城県指定史跡となりました。しかし、暗渠であるために地上からはその位置が把握できず、土木工事の際に予期せず発見されたという例もあることから、正確な位置の特定と市民への周知が依然として大きな課題となっています。



笠原水道第 6 次 岩隠れ出土状況
水道には蓋が敷かれている